

「底が突き抜けた」時代の歩き方 414

善意の壁 悪意の底なし沼ー映画『ドッグヴィル』

『奇跡の海』(96年カンヌ国際映画祭グランプリ) 『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00年カンヌ国際映画祭パルムドール大賞)、そして今回の映画『ドッグヴィル』と、ラース・フォン・トリアー監督の映画を並べると、「地獄への途は善意で敷き詰められている」という言葉がふと浮かんでくる。今回の『ドッグヴィル』(犬の町) で、その言葉がいよいよ極まってきたように感じられる。

スペクタクル的な大スクリーンの映像、大音響、変幻自在な特殊撮影……に慣れた観客の目にまず飛び込んでくるのは、「何もない空間」であり、黒い床に引かれた白線によって、この小さな村の各所帯の敷地や町並みが表わされ、ところどころにいくつかの小道具が置かれているだけである。要するに、簡素な舞台装置がそこにあるだけで、村人の家や教会などの建物はすべて白線で床の上に書かれ、したがって、床や壁やドアなどは省略されており、演劇での舞台がそうであるように、椅子や机など最低限の小道具が配置されているにすぎない。全篇にわたって照明は暗くされ、登場人物がパントマイムのように存在しないドアを開けるときは、ギイーという効果音が入っている。隣家を訪れるときにもノックの音だけがするといった具合だ。人工国家のアメリカを物語上の舞台としているから、そんな人工的なシンプルさで構わないのだということでもないだろうが、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』がフライト恐怖症(閉所恐怖症) の監督の都合によって、スウェーデンの撮影スタジオ内で全篇の撮影が行われたことの延長線上に、この簡単な舞台装置が位置づけられているようにも思われる。

映画製作にかかるコストはかなり軽減されただろうなあ、と思わず観客に計算させてしまうほどのシンプルな造りであり、観客は映画のなかで舞台演劇を観させられているといってもいいほどだ。もちろん、造りはシンプルであっても、その中で進行するドラマはシンプルはとてみえない。むしろ、造りのシンプルさとドラマの展開の複雑さとの対比によって、その複雑さをより一層際立たせるために、造りをシンプルにしたのかもしれない。人間の集団の塊を描くのに、どうして造りに手間暇かける必要があるのだ、というのが監督の姿勢のような気もする。実際、村人の各家には建物自体が存在していないので、すべてが丸見えになっている。その丸見え状態は物語の進行によって、彼らの中に隠されているものがしだいに露わになっていき、丸見えになっていくことを暗示していると解せられなくもない。

実験的、といういい方がなされているが、舞台には登場人物がいて、彼らの座る椅子

や机があれば、それで十分、家屋なんぞは白線でも囲っておけばよろしい。俳優が演じる小さな村の貧しい住人が一人のよそ者の出現によって、どのような変貌を日常生活の流れの中で刻々と垣間見せていくか、それをとっぴりと観ていただきたいという意図であるなら、前述したように、造りのシンプルさがドラマの流れの複雑さを際立たせていくかもしれないけれども、同時に造りのシンプルさなど意に介さないリアリティが、登場人物たちの心の動きや生活行動の強調の中に求められることになるのも確かである。しかし、舞台に配置されている椅子や机が記号でしかなく、舞台上に描かれている囲い線としての道や家やガーデンなどが記号として描かれるとき、登場人物もまたすべて記号であることを免れえなくなっている。

ドッグヴィルはロッキー山脈の麓にある人口23人の小村の設定になっており、舞台上のなにもかもが記号化されて描写されるとき、当然ながら、ドッグヴィルそのものが記号化された小村として、その記号化は「アメリカ」を記号化すると同時に、「アメリカ」をも超出して世界そのものの記号化にまでその作用が及んでいることに気づく。だから、いくら「アメリカ」のロッキー山脈の麓とか、あるいは時代が1930年代の大恐慌時代として設定されていようとも、我々観客はそんな設定に全く拘束されることなく、自分たちが任意に思い浮かべる村や町、集団、組織などに入れ換え可能になっている。「アメリカ」を全く観客の意識に上らせる必要のない造りや展開になっているとしても、監督の心の中ではドッグヴィルは、世界中のどの場所にもある村でありながら、「アメリカ」の中の村でなくてはならないように意識されているのだ。

映画パンフの中で監督はインタビューにこう答えている。

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』公開時に一部のアメリカ人ジャーナリストから行ったこともない国の映画を作ったと非難された。この批判は理解しがたいし頭にも来た。

『カサブランカ』を作った人たちはカサブランカに行ったかい？ ボガートは足も踏み入れちゃいない。カフカだって行かないで『アメリカ』を書いた。こんな不公平を言われるなら、アメリカの映画をもっと作ってやろうと決意したんだ。このアメリカはあくまで僕が目から見たアメリカ、僕の心の中のアメリカだ。この映画は科学的でも歴史的でもない、感情（エモーション）の映画なんだ。アメリカの話だけど、世界中どこにでも存在しうるスモールタウンの話でもある。

アメリカ人が他国民より邪悪とは思わないが、ミスター・ブッシュが語る無法者の国の方が邪悪だとも思わない。人々はいずこも似たり寄ったりさ。アメリカに言えるのは力（権力）が墮落させるということ。あんなに力があるんだから、僕ごときがからかっても痛くも痒くもなかつたよ。」

更にパンフには、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』非難に対して、『《トリアーはそれに猛然と抗議》し、『ドッグヴィル』に始まるアメリカ三部作の構想を打ち立ててそれをとことん続けることにした』と、記されている。《彼の知るアメリカのコラージュと

して…。カフカの「アメリカ」、ハードボイルド小説、トーマス・エディソン（主人公の名）、トム・ソーヤーの冒険、大統領、民主主義、ギャング、デヴィッド・ボウイの「ヤング・アメリカン」、ジョン・フォード「怒りの葡萄」、大恐慌時代、これらトリアーの頭の中にちりばめられていた「アメリカの記号」を彼は除々にパズルのように組み合わせていった。》

監督はまた、先のインタビューで「映画を作るとき、あることで“変な”方向をとったら、残りはすべて“普通”にしとく方がいい」と語っており、その理由として「いろんなことをやりすぎると観客はどんどんついてこれなくなる。一度に多くのことをしすぎないこと。実験で大事なのは一度に一つずつファクターを変えることだよ」と説明されているが、「アメリカの話だけど、世界中どこにでも存在しうるスモールタウンの話でもある」という趣旨に対応させて、把握することができるようにも思われる。「“変な”方向」とは特殊であり、「“普通”」を普遍と理解するなら、アメリカという特殊を描きながら、「世界中どこにでも存在しうるスモールタウン」の普遍性を指し示した、ということであるからだ。つまり、アメリカという社会（のみ）を描くことによって、その社会の外の社会まで指し示している、ということなのだ。

9・11以降、アメリカといえば（米国流）民主主義の印象が強いが、ドッグヴィルという小村はまさしく、住民参加の話し合いの集会によってさまざまな問題を解決していくという「民主主義」の精神が体现されているコミュニティであり、「アメリカの記号」がそこに象徴的に覗き込まれている点で、そしてその「民主主義」の精神によって村が破滅していく点で、紛れもなく「アメリカ」がよく描きだされていると思う。しかし、「民主主義」の精神の有無にもかかわらず、コミュニティを守るためにはよそ者は受け入れないし、徹底的に排除するという村民の意識は世界中のどこのスモールタウンにもみられるものである。よそ者の排除をアメリカは民主的に行っているのに対して、アメリカ以外のスモールタウンでは非民主的に行っているという差異があるだけであり、よそ者の排除では世界共通なのだ。

さて、ストーリーに入る前に、映画パンフに記されている各家族について、時計回りの順に紹介しておく。

（OLIVIA&JUNE）

オリヴィア 村人の家事を手伝い生計をたてている黒人女性。陽気だが体が不自由な娘を持つ。

ジューン 病気で働くことができないオリヴィアの娘

（THOMAS EDISON'S HOUSE）

トム 自称作家。グレースをかくまうよう村人に訴える。徐々に彼女に思いを寄せるようになる。

トムの父 元医者。村人の人望は厚いが秘密の多い薬棚を持つ。

(HOUSE OF JEREMIAH)

マーサ 牧師が来るまでたった一人で教会を管理している。いつも音の出ないオルガンを弾いている

(A FUGITIVE)

グレース ある日突然村に迷い込んできた美女。ギャングに追われているらしい。

(BEN'S GARAGE)

ベン トラック運転手。酒飲みで月に一回売春宿に行く。グレースの逃亡を手伝おうとするのだが....。

(MA GINGER'S SHOP)

ジンジャー夫人 村にただ一つの雑貨屋を営む。強欲で値段が高い。グーズベリーの畑を何よりも大切にしている。

グロリア 雑貨屋の共同経営者。

(McKAY)

ジャック・マッケイ 盲目の老人。目が見えないことを隠すために家から一步も出ない。

(THE HENSON'S)

ヘンソン 安物ガラスを削って高級品に見せる工場を営む。無口な職人。

ヘンソン夫人 ビルの妻。内気で臆病。興奮すると喘息の発作をおこす。

リズ・ヘンソン 父親の工場を手伝う。密かに村を出るという野心を持つ。グレースが来るまで、トムは彼女に思いを寄せていた。

ビル・ヘンソン リズの弟。気が弱く猜疑心が強い。トムのチェス友達。

(CHUCK'S FAMILY)

チャック 林檎畑の主。最後までグレースを村に住まわせることに反対する。いつも不機嫌。7人の子供を持つ。

ヴェラ チャックの妻。子供たちを溺愛しているが夫婦仲は悪い。被害妄想の気がある。

モーゼス チャックとヴェラの飼犬。いつも腹をすかせ村の危険を察知すると低くうなるように吠える。

ドッグヴィルの各住人について書き写しながら、トーマス・エディソンの名前が気になってならなかった。なぜなら、その名前は日本人には「エジソン」で知られる、かの有名な発明王の名前と同じであったからだ。もちろん、「エジソン」は二重電信機やスズ箔蓄音機、カーボンマイクロホン、白熱電球、映画、アルカリ蓄電池、謄写印刷機などを発明した電気技術者であって、映画の中の、作家を自称して、よそ者であるグレースの唯一の理解者を装うトム青年とは似ても似つかない。監督が意識的にトーマス・エディソンの名前を持ち出したのは、発明王エジソンとの連想からではなく、アメリカを代表する記号としての借用にすぎなかったことが窺われる。

映画『ドッグヴィル』は、9章のエピソードとプロローグから成り立ち、しかも章ごとの字幕によって出来事が予め知らされ、《ナレーター（ジョン・ハート）がたえず状況を語り続け観客をアジテートする》スタイルをとって、進行していく。

PROLOGUE 村とそこに住む人々の紹介

ロッキー山脈の麓、孤立した村「ドッグヴィル」の23人の住人たちが紹介されている。建物はどれも貧相で粗末な小屋のようであり、一番まともそうなのがトム（ポール・ベタニー）の家であることによって、住人たちの中でトムが一番まともそうであるのが浮かび上がってくる。

CHAPTER 1 トムが銃声を聞き、グレースと会う

いつものようにトムがビルとチェスをしていると、ジョージタウンの方向から一発の銃声が聞こえた。人の気配がする暗闇に目をこらすと、一人の美しい女性グレース（ニコール・キッドマン）が佇んでいた。助けを懇願する彼女を廃坑にかくまうと、やがて黒塗りの車に乗ったギャングたちが彼女を追ってやってきた。トムはうまく取り繕って、彼らを追い払うことに成功する。翌日トムは集会で村人たちに彼女をかくまうことを提案するが、即座には受け入れられない。そこで全員の賛同を得るために、二週間で彼女が村人全員に気に入られること、という条件付きでの同意を得る。

CHAPTER 2 グレースはトムの計画に従い 肉体労働を始める

グレースはトムの計画に従い、無償で肉体労働を提供することにする。しかし、自分たちのことは自分たちの手で仕事を切り盛りしていた村人たちは、彼女たちにやらせてもらう仕事はないと断る。それでも熱心に足を運ぶグレースを見かねて、徐々に仕事を頼むようになり、心も開いていった。だが、頑固者のチャックだけはそんなグレースを遠ざけていた。

CHAPTER 3 グレースが挑発的な試みに喜びを見出す

グレースは村人たちに好かれるために仕事を手伝ったり、村の子供たちの面倒を見たり、かいがいしく働くなかで、しだいに彼らが好きになり、より親密な接触を試みるようになっていく。そんな彼女を村人たちも受け入れて、彼女はもうまるで村人の一員のようになていく。二週間はあっという間に過ぎ、いよいよ彼女をこれからもかくまい続けるかどうかの話し合いが、村人全員でなされる時が来る。結果はすでに見えており、チャックさえも同意することによって、全員一致でグレースをこれからも村に置くことになる。

CHAPTER 4 ドッグヴィルの幸せな日々

グレースはヴェラの子供たちの世話をし、マーサーとオルガンを弾いたりして幸せな日々を過ごす。そんな彼女の労働に報いるために、村人たちもわずかだが報酬を支払うようになる。そんなある日、めったにこない警察がやって来て、グレースを探す一枚の手配書を壁に貼り付ける。それを見た村人たちの間に不安と動揺が走る。

CHAPTER 5 とにかく独立記念日

7月4日、アメリカの独立記念日である。普段は陰気なドッグヴィルもこの日ばかりは華やかであり、ガーデンで開かれたパーティで、グレースが来たおかげで村は明るくなり、活気が出てきたと賞賛され、彼女への感謝の気持ちが口にされていく。村人たちの彼女に対する親愛の情がますます深まっていくようにみえるなかで、彼女が強盗に関与しているという内容の二枚目の手配書が届くと、事態は一変し、村人たちの態度が硬化する。グレースに魅かれ始めていたトムは「ギャングの圧力だ」と必死に説き伏せるが、自分たちの身を案じ始めた村人たちは聞き入れない。さて、グレースをどうするか。強盗に関与している（かもしれない）彼女を今更村の外に追放するわけにもいかない。もし彼女が捕まったとき、村に彼女をかくまっていたことがばれるからだ。村人たちも仕方なく彼女を村に留め置くことにするが、彼女のほうも居つづける代償として、二倍の無償労働を村人たちに提供することを約束せざるをえない状況に追い込まれていく。

CHAPTER 6 ドッグヴィルが牙をむく

村人のグレースに対する態度はもはや奴隷扱いに等しく、疲労困憊のなか、チャックの林檎畑を手伝っていたグレースは、ギャングの追っ手が村に来たが、告げ口しないことの代わりに彼女の体を求めて来たチャックからレイプされる。抵抗する気力も失せている彼女はチャックのなすがままであり、その後もレイプは続く。

CHAPTER 7 ついに嫌気がさしたグレースはドッグヴィルを去り 再び新たな日を迎える

チャックのことを聞いたトムは、村からグレースを逃がそうと決意する。トラック運転手のベンの車に隠れて逃げることを思いついたトムは、そのお金を工面するために父親から借りることを彼女に話す。トムに頼る以外なす術のなくなったグレースは村から出て行くことを決め、トムと共にベンに協力を頼む。報酬を受け取することを条件にグレース逃亡の手助けを約束したベンは、トラックの荷台にグレースをかくまい、ドッグヴィルをあとにする。荷台に隠れて積み荷のリンゴをかじりながら、グレースは目的地に向かって走りつづける車に身を委ねているが、途中で車が止まる。ベンがシートの中に潜り込んできて、手助けが危険な割に報酬が安すぎて見合わない、この報酬じゃ一回の売春宿代にも満たない、と不満を口にする。彼女が自分にはもう払えるお金がないというと、金がなければ、売春宿代分を体で払ってくれといって、ベンは彼女の上に覆い被さる。なすがままにされるグレース。車が再び動き始めると、彼女は疲労で眠りにつく。しかし、目を覚ましてみると、車は再びドッグヴィルに戻っていた。ベンは裏切ったのだ。

車を取り囲む村人たちにむかって、ベンは荷物台にグレースが隠れていることを知らないまま、車を走らせていたが、途中で彼女を発見して引き返してきたという弁明を行った。チャックは積み荷のリンゴがグレースによって傷ものにされたことに腹を立て、村人たちは村から逃げようとしたグレースに怒りと不審を募らせていく。村人たちはグ

レースの逃亡を防止するために、鎖のついた首輪を彼女にはめ、重労働を課する。

CHAPTER 8 集会で真実が語られトムが退席する（だが後で戻る）

トムの父親の金が盗まれるという騒ぎが起き、グレースが逃亡の際に盗んだという嫌疑がかかる。彼女がトムに問い質すと、彼は父親にお金の話をきりだせなかったので、黙って拝借したこや、自分がそのことを明らかにすると、自分だけでなくグレースまで立場が悪くなるので黙っていたと話す。そして、村人たちの怒りを鎮めるために、グレースが彼らの前で話しをすることを提案する。トムは集会を開いて、グレースの話を聞くように村人たちを説得するが、村人たちの反応はあまりにも冷ややかで、耳を貸そうとはしなかった。連日のように村人たちにこき使われ、夜は夜でグレースの疲れた体を弄ぶように男たちが通ってくる。見かねたトムが彼女に自分と一緒にこの村から逃げようと提案し、彼女を抱こうとするが、彼女は拒む。トムは村の男たちには黙ったまま体を自由にさせるのに、君を愛している自分には体を触れさせようとししないのか、と苛立つ。首輪をはめられて身動きできない状態で、他の男たちと同じようにあなたには抱かれたくない。自分が自由になった状態であなたに抱かれないから、とグレースは説明するが、トムはプライドを傷つけられたように感じている。

トムが帰った後、チャックの妻ヴィラを含む数人の女たちがグレースの許を訪れ、ヴェラがチャックとグレースの関係について、グレースがチャックを誘惑したと夫が告げ、自分もそう思ってきたが、チャックのほうからグレースに手を出したことがわかったので許してほしいといい、他の女たちも口々に自分たちがグレースのことを誤解していたことや、自分たちの仕打ちを許してほしいと謝る。深夜、トムと一緒に逃げようと家の外へ出たグレースは、村人たち全員がまるで自分たちの逃亡を予見していたかのように、通りに集まって彼女の姿を認めるや、猫なで声で親しげに話しかけるのに驚く。不審な面持ちでトムの姿を探していると、彼は上機嫌でドッグヴィルを舞台にした自分とグレースを主人公にした小説を書いている、と彼女に話す。村人たちの夜中の集まりといい、トムの先ほどとは打って変わった挙動といい、グレースは何かを感じ取る。トムはギャングに通報することを決意し、村人たちもそのことを支持していたのだ。

CHAPTER 9 ドッグヴィルに待ち望んだ来訪者が現れ、映画は終わる

ある日、キャニオン・ロードからグレースに聞き覚えのある車の音が聞こえてくる。ギャングたちがやって来たのだ。グレースは彼らに捕らえられ、ボスの許に引き立てられる。車に乗っているボスの隣に座らされた彼女に、ボスはなぜ、わしの許から逃げたのかと訊き、お前はわしに傲慢だという言葉を投稿つけて、あの日、わしの前から姿を消したが、お前のほうこそが傲慢なのだ、と娘のグレースにいう。グレースは、ギャングに囲まれて育った環境で自分は残酷に人がどんどん殺されていくのを目撃してきた。パパは権力さえ握っていれば、人を殺すことも、従わせることも、すべて自分の思い通りになると思っているけれど、それが傲慢じゃないの、と反論する。いや、人間はみんな

な善人だと信じているお前のほうが傲慢だ、と父親は切り返す。

人間が善人だというのは嘘だ、人間ほど邪悪なものはない。嘘をついたり、言い逃れようとしたり、人の目を盗んで好き放題したり、放っておけば人間はなにをするかわかったもんじゃない。そんな人間を統制するために権力が必要なんじゃないか。権力がなければ人間はいままで生きてこられていない。お前は必死になって自分が正しい人間になろうとして、周囲の人間を善人だと信じようとしているだけではないか。人間はみんな善人なのに、トラブったりするのは全部自分のせいだ、とお前は思い込んでいる。それが傲慢なんだ。そのことがお前には分かっていない。人間がやっていることを許すことによって、お前はいい人間になろうとしている、なんて傲慢なんだ。グレースは黙って父親のことを聞いている。わしはもう年だから、わしの持っている権力を全部お前に譲りたいんだ。お前がわしから逃げていた間、なにをしていたかはわからんが、お前は周りの人間を許すことによって、いい人間になれたのか。周りの人間がみんな善人であると信じることができたのか。

グレースは考え込んでいる。そんな娘を見て、父親はわしの権力を手にさえすれば、お前は思いのままにすることができるんだ、と吹き込む。パパの権力を手にすれば、私はなんでもできる、と彼女はうわ言のように呟く。車の中で話し込んでいるグレースとボスを見て、村人たちはなにが起こったのかと不安な面持ちで群れている。わかったわ、パパの権力を使って私が思い通りにやればいいのね、と決心したようにいうと、ボスはそうだ、なんならこの村の連中を全員撃ち殺すことだってできるんだ。お前はどうかやらの村で教育されすぎたようだな、と苦笑する。彼女が車の外に出ると、村人たちは彼女を恐れて媚びるような物腰で近づく。「人間は自分の行動に責任を持たなくてはならないんだわ」といって、彼女は部下に村人を撃ち殺すように命じる。マシンガンが発射され、村人たちは次々と声もなく倒れていく。

村人全員が倒れている中で、トムが一人呆然と立っている。部下が彼をマシンガンで撃ち殺そうとするのをグレースは制止して、車の中からピストルを持ち出す。グレースが近づいて来るのを見たトムは自分の命を彼女が助けてくれたと思って、自分と彼女を主人公にしたドッグヴィルの小説が完成した喜びを彼女と共に分かち合おうとしたそのとき、グレースから銃をこめかみに突きつけられる。驚くような表情で、そんな！という一言がトムの口から洩れる瞬間、引き金が引かれてトムの体が崩れ落ちる。ドッグヴィルの住人は全員、こうして全滅した。グレースはギャングと一緒に車に乗ってこの村を去ろうとしたとき、犬のモーゼスが一匹取り残されていることに気づく。彼女はモーゼスの傍らに寄って、お前の飼い主はすぐに現れるわ、といって去っていく。

この物語のどこが「アメリカの話」なんだと、だれもが小首を傾げたとしても別に不思議ではない。先のインタビューの中で監督はこう語っている。

「グレースはけっしてヒロインじゃない。最も善意の人間だけど一人の人間だ。みな僕が殉教者の女性を描くと考えたがるけど、私のキャラクター達が女性であるとはかぎらない。彼らは私の一部である限りはね。村人にグレースの扱いを委ねたのは、個人を超えて与えられた力は彼らを墮落させるという考えからだ。彼らはグレースが来るまでうまくやっていたと思う。億万長者がゴルフをしてるだけならアメリカも美しい国だったけど実際は不幸にもたくさんの敗者がその影にいる。どんな人間にも善と悪があって、状況によって露呈するわけだ。」

そう、グレースが来るまでは、村人たちはなんの破綻もなく善良なままでいることができた。確かにグレースがやって来なければよかったのだ。彼女が追われて来たとしても、村人たちは自分たちの手に余る、「かくまう」などという大それたことをしなければよかったのだ。ところが、善良な人たちはなんにも考えずに引き受けてしまうのである。善良である所以だ。しかし、善意は疑うことをしないし、考えることをしない。つまり、善意が引き起こす事態については思ってもみない。いうまでもないが、善意とは意識するとしないとにかかわらず、一種の優越感情にほかならない。したがって、善意を施す側と施される側との間には、支配 被支配に似た関係が醸し出される。善意を施される側がその関係の枠内に収まっているかぎりには、善意が双方に対して害悪をもたらすことはない。映画でいえば、グレースが彼女を追ってくる関係と切断されて、よそ者から村人の一員として溶け込めば問題がなかった。実際グレースと村人の関係は警察が来て手配書を貼られるまでは、万事がうまく運んでいた。

追われてくる者は当然ながら、追われてくる関係を背負っていた。かくまう側は追われてくる者をただ単にかくまうだけでは済まされなかった。必ず追われてくる関係の前に立たされることになる。そのとき、どうするか。かくまう側の善意が発揮されるのは追われてくる者に対してであって、追われてくる関係の前では善意は立ち止まらねばならなかった。なぜなら、追われてくる関係をも背負い込んで善意は共犯関係へと突き進むか、あるいは善意を引っ込めて共同体を守るために、追われてくる者を突き放すに至るか、いずれかの途しかなかったからだ。いずれにしても、追われてくる関係の前では追われてくる者に向けられる善意はそのままでは通用しなかった。安全なところでのみ発揮される善意がその真価を問われるのは、安全な関係が危険な関係へと変わったときである。

チアン・ウェン監督の中国映画『鬼が来た！』もまた、厄介者が村の中に無理矢理に投げ込まれたことによって、村が全滅を余儀なくされていく悲劇的なストーリーであった。『ドッグヴィル』の場合は謎の美女が追ってから逃れてきて、村人にかくまわれるという話であったのに対して『鬼が来た！』の場合は戦時下の中国の寒村になにものかの手で日本兵の捕虜が投げ込まれて、村人にかくまわれるという話であった。前者は美女をかくまわなくともよいという選択肢があったが、後者は捕虜をかくまう以外の選択

肢はなかった。その意味で前者の村人は自由意思を行使できたのに対して、後者の村人は自由意思を封じられていた。もちろん、後者の場合、捕虜を殺すという選択肢がないわけではなかったし、村人たちはさまざまな方法で殺害を試みたが、殺害して日本軍にばれることの恐怖よりも、日本軍に捕虜を手渡していくらかの謝礼にありつこうとした。それが裏目に出て村人たちは大殺戮を被ることになったのだ。

『鬼が来た！』は戦時下の状況を抜きにしては考えられないストーリーであり、問答無用で村の中に「鬼」が投げ込まれたが、『ドッグヴィル』では村の中に逃げ込む美女が「鬼」かどうかは当人たちにもわからなかった。だいいち村人たちが民主的に話し合っ
てグレースを受け入れるという点が、『鬼が来た！』とは決定的に異なっていた。つまり、戦時下の選択不可能な状況に置かれている村人たちと、戦時下ではない選択可能な日常的な状況に置かれている村人たちとの決定的な落差。その落差の中にラース・フォン・トリアーのイメージする「アメリカ」を覗き込めるにちがいない。善意の国、民主主義の国アメリカであり、おまけにグレースをかくまうために集会を開いて、村人を説得しようとするトム、自分に危害が降りかかってきそうになれば、手の平を返して理屈をこねて裏切るトム、作家でもあろうとする知識人のトム、このトーマス・エディソンの中に善良なアメリカ人の姿が一杯あふれ返っているのではないか。

ギャングとつながっている美女のグレースもギャングもアメリカであり、村人たちがギャングのマシンガンによってあっけなく全員撃ち殺されるのも、アメリカ以外に考えられない。トリアー監督は村の中にグレースを放り込むことによって、露出してくる彼の感じている「アメリカ」の物語を描いたのであって、それ以外のおぞましい悲喜劇を描いたわけではない。不思議なことに、この映画を評する誰一人として監督の「アメリカ」に言及するものはいない。『週刊文春』(04・2・26)に掲載されている寸評は、次のようなものだ。(5段階評価による の数)

《ハリウッド娯楽作の対極に立つ映画。実験性は面白いが、人間性悪説的な作者の主張に3時間付き合わされるのは辛い。》(映画評論家 品田雄吉)

《ストイックな演出と巧い役者陣で、よくも悪くも息詰まる。人間の心のおぞましさ。N・キッドマンは監禁美女姿で好演。》(コラムニスト 中野 翠)

《田舎町の姑息と宗教的裁きの傲慢。苦い味は残るが、頭にこびりつく。この監督の人間嫌いは、「反米」を超えて根深い。》(翻訳家 芝山幹郎)

《前半は睡魔に襲われるほど退屈。だから9章に爽快感を感じてしまう。実験的な面白さは買うが監督の悪意にはゲンナリ。》(作家 斎藤綾子)

《実験映画だ、と断定するには面白過ぎるし、エンターテインメントとすれば美大映画部の卒業作品の秀作かしらと思う。》(映画評論家 おすぎ)

上記の寸評の中で唯一「反米」という言葉で、トリアー監督の「アメリカ」に触れようとする芝山幹郎は、映画パンフのトリアー監督は、《偽善的な話術で観客の信頼を得

るくらいなら、残酷な真実を観客に突きつけてしまおうとする。敬意を伴ってサディストと呼ばれたヒッチコック同様、彼も観客を挑発する。その根底には、「人間は犬以下だ」と考える強烈な人間嫌いがある。理想主義の欺瞞性に対する根深い怒りもある》と指摘して、こう説明する。《なるほど、この映画は、アメリカのスモールタウンに顕著な「偏狭と姑息と強欲」をあばいている。が、だからといってこの映画にこめられた寓意を「反米的」と呼ぶのはあまりにも浅薄な態度だ。むしろフォン・トリアーは、世界中の人間の内部に棲む愚劣や傲慢や怯懦を敵にまわしている。それらに対して、彼は怖いほどシニカルなメッセージを送る。だからこそ、映画を見終えたあとも、われわれの脳裡には登場人物たちの惨めな顔が宿りつづける。口のなかに残る苦い味を超えて、「ドッグヴィル」は頭にこびりつく。》

むしろこういったほうがいいかもしれない。《世界中の人間の内部に棲む愚劣や傲慢や怯懦》はもちろん、アメリカのスモールタウンに特有なものではなく、限定されるものではない。しかし、どこのスモールタウンにも《顕著な「偏狭と姑息と強欲」》が、それらと全く相反する善意とか平和とか、自由とか民主主義とか、進歩とか宗教とかの縫い包み^{ぐるみ}的な装置のなかで最も激しく、あからさまに噴出してくるのが、「アメリカ」という国のスモールタウンなのだ、とトリアー監督はいつているのだと思われる。そのことを端的に象徴しているのが、グレースという名の美女の出現によって物語が始まっている点だ。グレースの語には「優美、優雅、美点、好意、神の恩寵、（食前、食後の）祈り」等の意味があり、彼女はそのような、「ドッグヴィル」の寒村には全く似つかわしくない存在として降臨するが、集会での民主主義的な手続きを踏んで受け入れた村人たちは、結局のところ「神の恩寵」に耐えられずに、犬以下の奴隷に貶めて彼女を陵辱することになってしまうのである。

《世界中の人間の内部に棲む愚劣や傲慢や怯懦》を容赦なく抉りだすだけであるなら、なにもアメリカのスモールタウンを舞台にしなくともよい。なぜ、トリアー監督がアメリカのスモールタウンを舞台にしたのかがみえてこなければ、遂にこの映画はわからないだろう。映画『鬼が来た！』は《人間の内部に棲む愚劣や傲慢や怯懦》を戦時下の状況で描いたが、映画『ドッグヴィル』はそれらをアメリカのスモールタウンで描いたのである。どんなに理想的な制度の下で暮らそうとも、人間というものは自らの生活の質や水準に見合ったかたちでしか外の世界を受け入れられないにもかかわらず、生活の質にすぐわない善意や理想主義でもって外の世界に対処しようとするなら、人々の生活が善意や理想主義で押し潰されることになる有様を、トリアー監督はアメリカのスモールタウンのなかで描いたのではなく、アメリカのスモールタウンそのものとして、いや「アメリカ」そのものとして描いたといえるかもしれない。

2004年 4月3日記